熊本大学学術リポジトリ

台湾原住民の住宅形式に関する事例的研究 : タイヤル族とブヌン族について

著者	鳥飼 香代子, 今里 美幸, 蕭 玉燕, 佐藤 栄希子
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 自然科学
巻	48
ページ	49-70
発行年	1999-12-10
その他の言語のタイトル	A Case Study of Native Houses in Taiwan : Taiyaru and Bunun
URL	http://hdl.handle.net/2298/2374

熊本大学教育学部紀要，自然科学
第48号，49—70，1999

台湾原住民の住宅形式に関する事例的研究

－タイヤル族とブヌン族について－

鳥飼香代子・今 里 美 幸*・蕭　玉 燕**・佐藤栄希子*

A Case Study of Native Houses in Taiwan

－Taiyaru and Bunun－

Kayoko TORIKAI, Miyuki IMAZATO*, Yuyan XIAO**, Ekiko SATOU*

(Received September 1, 1999)

We report on the native houses in Taiwan, because economic development has forced the native peoples to move to cities to study and to get jobs. Due to these economic influences, they would like to build new Chinese style houses in their home towns and villages. Year after year, native houses have been decreasing in Taiwan, so we have to hurry to record them.

We focused on the two minorities, the Taiyaru and Bunun, and reseached their houses. Then we compared them with the report written by Dr. Kawashima. This report describing the native houses was done in 1930.

Key words : Taiwan, Native house, Minority, Taiyaru, Bunun

1. はじめに

現在，台湾[1]には約2千万人が居住しており，そのうちいわゆる原住民[2]と自称しているのはタイヤル族，ブヌン族，アミ族，サイシャット族，ツオウ族，ルカイ族，パイワン族，プユマ族，ヤミ族の9種族である．

台湾原住民の住居についての研究は，1895年～1945年の日本人統治時代に行われたものを除くとほとんどない．近年では，青木等のルカイ族の住宅平面構成に関する研究が注目される程度である[3]．青木等は，日本人統治時代の「理蕃行政」や，戦後民国政府が行った原住民の「山地生活改善運動」の一環である「還村計画」の推進で，原住民の住居や生活様式はその性格を残しながらも，漢民族風へと変容し，また急速な経済発展は著しく彼らの生活様式を変貌させた，と指摘している．さらに，このような運動や発展が住民にとって本当の意味での生活改善になったのかどうかはわからない，と述べている．

本論文では，台湾原住民の住宅形式を検討することによって，今日的特徴と変遷の後を追いたい．具体的には1930年代と現在の住宅平面とを比較し，住宅の変遷及び伝統的住居の平面構成の変容過程・要因について探ることを目的としている．ここではタイヤル族，ブヌン族の住居を対象に考察する．

*　熊本大学大学院教育学研究科家政教育修了
**　台湾私立南栄工商専科学校　応用外語科　講師

2. 調査の方法

調査の対象地域は南投県仁愛郷の静観村（タイヤル族），万豊村（ブヌン族），南投県埔里鎮にある中正村（ブヌン族）の3村，調査期間は1998年3月17～25日の9日間である（図1）．原住民と交流のある台湾人にそれぞれの集落を紹介してもらい，事前交渉なしに住宅と住み方の訪問調査を実施した．調査内容は住宅平面の採取，調査紙によるヒアリング調査，主要な部屋の写真・ビデオ撮影である．調査の具体的内容は次のとおりである．

i）　住宅平面の採取（家具の配置，設備を含む）

ii）　ヒアリング調査

(1) 地域生活について

・集落の歴史と運営機構

・年中行事と生活慣行等

・婚姻形態と信仰，方位観

・生産と地域施設

(2) 住居について

・家族員数，家族構成，家族形態，各家族員の年齢，各家族員の職業及び属性

・建築年数及び増改築年数

・土地の入手法　供給形態と供給主体

・部屋の使い方（食事・だんらん・接客など・寝室の有無とその場所）と起居様式

iii）　写真・ビデオ撮影

・住宅の外観，DK，居間，残余室，設備，家具，その他

i）の住宅平面の採取については，住宅内の間取りを1室ずつ描き写した．さらに，それらの居室に配置されている家具や設備，置物なども同様にとりあつかった．

ii）のヒアリング調査は，通訳を介して行った．ヒアリングを受けた家族員は各世帯さまざまであった．生活行為については，各行為を行う場所は住居内のどこであるかを尋ねている．

図1

iii）の写真・ビデオ撮影は，調査後の平面図の描き漏れなどを確認するために行っている．

3．結果及び考察

3-1．南投県について

今回調査を行った住宅はすべて南投県にある．台湾本島の中央部に位置する本県は，玉山，東玉山，秀姑巒山などの台湾最高峰の山岳地域でもある．主にタイヤル族，ブヌン族が居住しており，山地であることから，他の地域よりも伝統的な住宅や暮らしが残っているのではないかと考え，この地域を調査対象とした．

次に現在の住宅における空間の構成及び住まい方の実態について明らかにするため，3村10戸の典型的な事例についてみていく．

3-2．タイヤル族　静観村について

静観村は南投県仁愛郷北西部に位置し，近くには同じタイヤル族である平生村，平静村などがある．また，観光地として有名な蘆山温泉や清境農場などもある．

この集落は，かなり高地に形成されており，人口約400～500人，世帯数約100世帯である．集落へ行くには山道を登っていく必要があるが，その道は自動車2台がぎりぎりすれ違うことが出来るくらいの幅しかなく，舗装もされていない．また，集落に入ると1本舗装された広い道路が通っており，それに細い道が交差している．集落の半分は平坦であるが，残りの半分は山の斜面であり，そこに住宅が建てられている．

集落の主な産業は野菜（キャベツ）と果物の生産で，昔は漢民族の商人と1回10年以上の契約栽培をしていた．この契約は収穫の量・質に関わらず一定の収入を得ることになっているが，契約価格が極めて低いためキャベツの生産利益が高くなった現在では契約を結んでいない方が経済的に余裕がある．そのため，住宅建設は契約をしていない人からはじまったとのことである．

なお住宅を新築するときは子ども世代には頼らず，野菜生産の収入と借金によって行う．この集落は高地にあるため建設費（主に輸送費）も高く，平地で住宅を建設する際必要な砂が1m^{2}あたり1.500元に対してここでは6.500元かかる．なお建設業者は漢民族である．

教会は教育，政治の場として活用されている．教会の集会に参加していないと選挙権がないため，住民の4分の3がキリスト教である．今回の調査時は，全教徒を収容するための増改築中であった．なお，結婚は教会，葬式は教会の宿舎で行われる．このように教会は地域生活の中心施設でもある．

至る所に子どもたちが数人ずつ集まって遊んでいる．また，就学前の子どもが赤ちゃんを世話している場面にも多く出くわした．

この集落は農地ごとに住宅が張り付くいわゆる点在型の集落構成ではなく，住宅だけを集中配置させた集中型であった．学校や教会など公共施設があるが，集落内にばらばらに配置されていた．

3-3．平面構成

次に，各事例について平面構成や住まい方についてみていく．

〈事例1〉（図2）

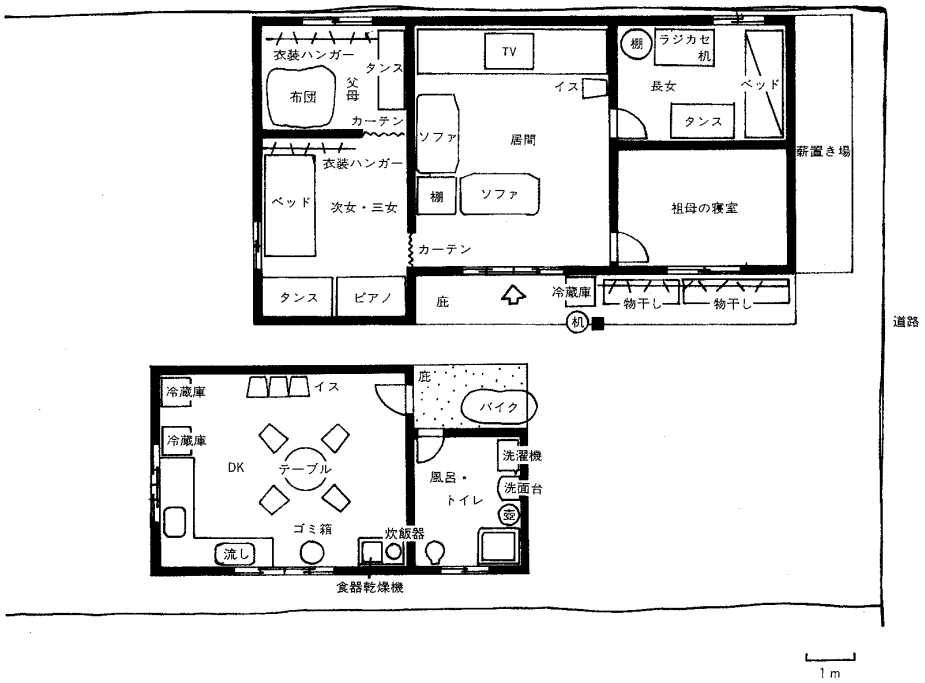

図 2

家族構成は，祖母(85 歳)，父母，子ども 3 人の 6 人家族である．父母は農業労働者である．道から敷地内にはいると右側に母屋，正面に DK と風呂・トイレがある．敷地面積は約 180m^2，母屋の延べ面積は 54.8m^2 で，壁はコンクリートブロック造りであるが，一部の壁には煉瓦が残されている．柱は木造，屋根は瓦葺きである．窓はガラスで，外側に鉄の柵が付けられている．母屋の床はもともとタイル敷きであるが，居間にはその上に P-タイルが敷かれている．母屋の横にはトタン屋根で作られた薪置き場が隣接している．また，母屋の壁には様々なものが雑然とぶら下げられている．母屋の玄関を入るとすぐ居間になっており，テレビ，応接用ソファーが置かれている．居間の両側に 2 室ずつ個室がある．右側の 1 室は長女の寝室，もう 1 室は祖母の寝室であり，それぞれベッドが置かれている．反対側は父母と次女，三女の寝室となっており，布団を敷いて就寝する．布団は昼間敷かれたままになっている．食事は長女が作り，DK で食べる．だんらんや接客は居間で行う．

別棟は延べ面積 25.4m^2，波形スレートの屋根で，コンクリート造りである．窓はアルミサッシで，外側には鉄の柵が付いている．内装は，DK，風呂共に床，壁はタイルが貼られている．DK はかなり新しく，システムキッチンが備え付けられている．タイル敷きで広さも 19.2m^2 と広い．

風呂はユニットで，ホーロー製の浴槽，トイレ，洗面台が設置されている．シャワーは付いていない．浴槽の横にはプラスティック製の壷が置かれ，この中に水が貯められている．

洗濯物は母屋の玄関横に竹や鉄の棒を掛け，それに掛けて干す．

その他，主な所有物としては，冷蔵庫 (3 台)，食器乾燥機，洗濯機，電気炊飯器，テレビ，ラジカセ，ピアノ，バイクなどがある．

〈事例 2〉（図 3）

家族構成は，父と母の 2 人暮らしである．農業を行っており，キャベツ，梨などを生産している．漢民族との契約栽培をしていないため経済的に余裕があり，現在の住宅から 2 筋下方に（す

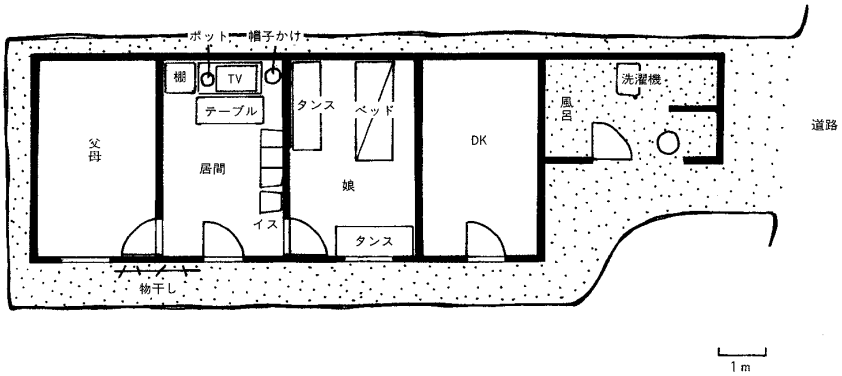

図 3

なわち，集落の中心道に近い場所に）新築中である．子どもが 2 人いるが，次女は高校生で現在通学のため台中市で暮らしている．

現在居住している住宅は，この集落の中で最も山に登った部分に建っている．築年数は 20 数年，延べ面積は 47m² である．敷地面積は約 80m² で，延べ面積ともに最も狭い事例である．全体的に木造で，屋根はトタン屋根である．DK はトタン屋根で作られており構造体としては風呂とあわせ別棟である．道を登り細長い敷地内に入っていくとすぐ風呂があり，その奥に DK，娘の部屋，居間，父母の部屋と続いている．風呂の前を通って，細い通路（庇の下）を進んでいくと一段上がった入口が 2 つあり，手前は DK 奥が居間である．居間の両端に娘と父母の部屋がある．通路は木で作られた柵で仕切られ，そのすぐ下方には下の住宅がある．洗濯物は通路に竹が渡されており，それに干している．トイレは敷地内に確認できなかった．

居間の入口を入ると，床には絨毯が敷かれ，正面に大型テレビがある．椅子とテーブルが置かれており，ここで接客やだんらんが行われる．隣の娘の部屋にはタンスとベッドのみしか置かれておらず，整頓されている．住宅の狭さや古さに比べ，電気製品や家具は新しいことから，近年の現金収入が安定していることが推察される．主な所有物は洗濯機，テレビなどがあり，他は不明である．

3-4．ブヌン族　萬豊村について

萬豊村は南投県仁愛郷南部，霧社水庫（曲冰遺址）の南方に位置し，近くには武界村，過坑村などブヌン族の村が点在する．また，萬大発電所も近い．この集落は霧社水庫のさらに下流に位置していたが，日本統治時代に山崩れがあり，一部がその上流に新集落を形成した．この新集落への移動の後，旧集落の人口は減少を続けている．これに対して新集落は元々水田であった土地を日本人が整理，分割して分け与えた土地であるため，当初から住宅は密集していたが，集落の大きさや人口はその後も増加を続けてきた．人口は新旧集落を合計すると約 700～800 人，世帯数は 120～150 世帯である．

新集落は主要道路に垂直に 3 本主な道路が並行し，さらにその道路に細い道が直交している．住宅は主要道路から山の方に向かって 12 区画並んでいる．3 本の道路はコンクリートで舗装され，その両端には排水溝が設けられており，各住宅とは低い段差又は樹木で仕切られている．集落の頂上付近には集会場，教会，警察，学校等が集まっている．

また，旧集落は下方に川が流れており，上方はすぐ山である．とうもろこし畑の中に 4～5 戸ずつ住宅が点在している点在型集落である．部族ごとに墓場は決まっており，旧集落の墓は集落の

横にある．墓参りは年に1回行うが，崖崩れのため道が遮断されており，現在は行くことはできない．このように，この集落の形態は新と旧とで集中型，点在型とに分かれている．

交通はバスが埔里市に向けて1日3回通る．2，3年前から村長の発案で道路の拡幅工事が行われているが，現在でも山の崩落で道路が狭くなっているところが3〜4ヶ所ある．街灯はないが，標識は整備されている．

集落の運営機構では，村長が1人，4年に1度の選挙で選ばれ，村民の要求をまとめ役所に持っていくことを主な活動としている．

年中行事は盆（4月），正月，仲秋の日（8月15日）に行われるが，ほとんど漢民族と同様の日程，形式となり，ブヌン族独自の行事は何もしなくなっている．正月，仲秋の日ともに都会に出た子どもたちが帰省し，自宅で行う．

出産は病院で行う．結婚式は集落の会館で村の人を集めて行う．40テーブル位の規模．葬式は自分の家で行う．一夫一婦制．核家族より同居が多い．結婚したら男性の家に入る．

鬼門などのように住宅の配列において特に注意することはない．山に建てられているのですべての住宅の入口は道路の方向に向かっている．

集落の産業としては茶の生産が主である．昔は米も作っていたが，経済的に有利なため今は野菜（トウモロコシ，豆，サツマイモなど）を作る世帯も多い．

若者は他の集落や都市部（台南，埔里，高雄，台北市など）に就職することが多く，過疎化が進んでいる．また，高校時代から進学のため都市部に出ていくものも多い．

学校，集会所，教会，水道施設がある．防火施設はないため火事の際は村人が手伝い，埔里市から消防車がやってくる．山の頂上に大きなタンクがあり，そこから1日朝晩2回1時間ずつ水が開放され，各家のタンクにためるようになっている．病院は埔里市にしかなく，診療所は霧社にある．小売店は新集落に3戸ほどあり，野菜や果物などの生鮮類は漢民族の商人が車で売りに来る．

3-5．平面構成

次に，萬豊村の住宅5例についてみていく．

〈事例3〉（図4）

祖父母の時代からこの地域に住んでいる．家族構成は，祖父（59歳），祖母（61歳），父（30歳），母（30歳），子（男4歳，男3歳，女2歳）の三世代同居世帯である．祖父と祖母は農業を行っている．昔は米作をしていたが，現在は経済的に有利な野菜類の生産に切り替えている．父母は，小学校の時のクラスメイトであり，同窓会で再会し，結婚した．父はこの地域に家があったが，畑づくりの関係で旧集落に住んでいた．現在父は軍人であり，たまにしか帰宅しない．

集落の中では上方に位置し，南側に道路が通っている．その向かい側にはバスケットボールコートがある．道路から敷地内にはいると手前に母屋，その奥に小屋（物置）がある．母屋の前には狭い前庭があり，イスが置かれている．敷地面積は約220m^2，母屋の延べ面積は94.3m^2，築年数は12年である．親戚の大工に依頼し建築した．建築期間は1年弱ほどである．建築する際には暑さ，台風などの対策は特にとっていない．

屋根は瓦葺きで，壁はセメント造り，建物自体敷地より一段上がっている．窓はアルミサッシで，外側にはすべて鉄の柵が付いている．床はすべてタイル敷きであるが，父母の寝室のみ他の部屋より一段高くなっており，フローリングになっている．

この住居は居間，DK，風呂，トイレ，残余室4室から構成されている．入口は母屋中央に位置

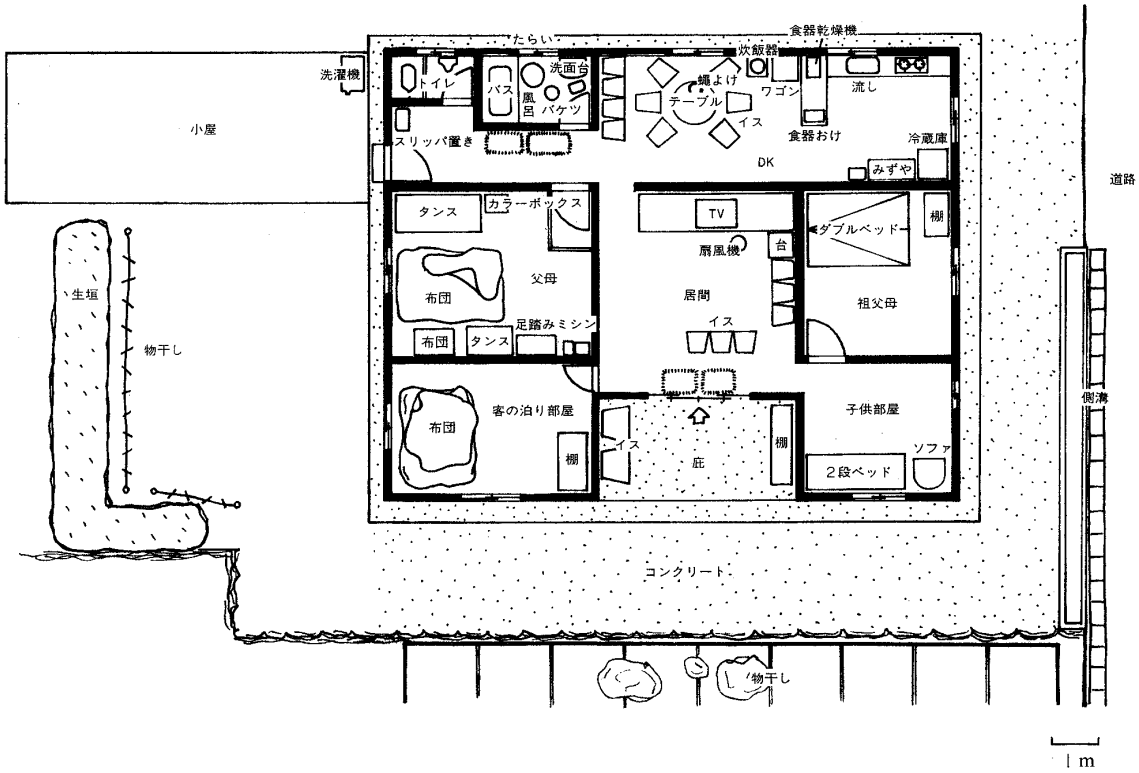

図4

し，玄関の手前で靴を脱ぐ．入口の右手には棚があり，靴を収納する．左手には椅子が2脚置かれており，日中を過ごす空間となっている．入ってすぐ居間があり，テレビ，応接テーブル，椅子などが置かれている．接客もここで行われる．床はタイル張りでひんやりとしている．3つの残余室はそれぞれ祖父母，父母，子どもの私室であり，残りの1室は母の姉など親族が帰宅した際に使用する．祖父母の寝室にはダブルベッドがあり，子どもは2段ベッドで就寝する．父母は一段高い床の寝室に布団を敷いて寝る．布団は敷きっぱなしであり，布団をしまう押入のようなスペースはどの部屋にも取られていない．食事は毎回母が作り，台所でみんな揃って食べる．だんらんと接客は居間で行う．洗濯物は住宅横にロープを掛けて干している．また，前の住宅の屋根の上にも置いて干している．

お金があれば2階を増築したいと考えている．この家を建築する際，日本と同じようなもち投げを行った．漢民族は行わないため，この儀式は日本統治時代に始まり，現在も続けられていると考えられる．

将来子どもたちのために都会へ引っ越すが，子どもたちが大人になったらまたこの土地に戻りたいと考えている．父母の世代は高山族語と北京語を話すが，子どもの世代は北京語しか話せない．母は女6人，男1人の7人兄弟の3番目で，他の兄弟は他の集落に住んでいる．

また，主な所持品は冷蔵庫，食器乾燥機，電気炊飯器，洗濯機，テレビ，扇風機，足踏みミシン，バイクである．

〈事例4〉（図5）

家族構成は祖父（70歳），祖母（60歳），母（21歳）の三人暮らしであり，商店を経営してい

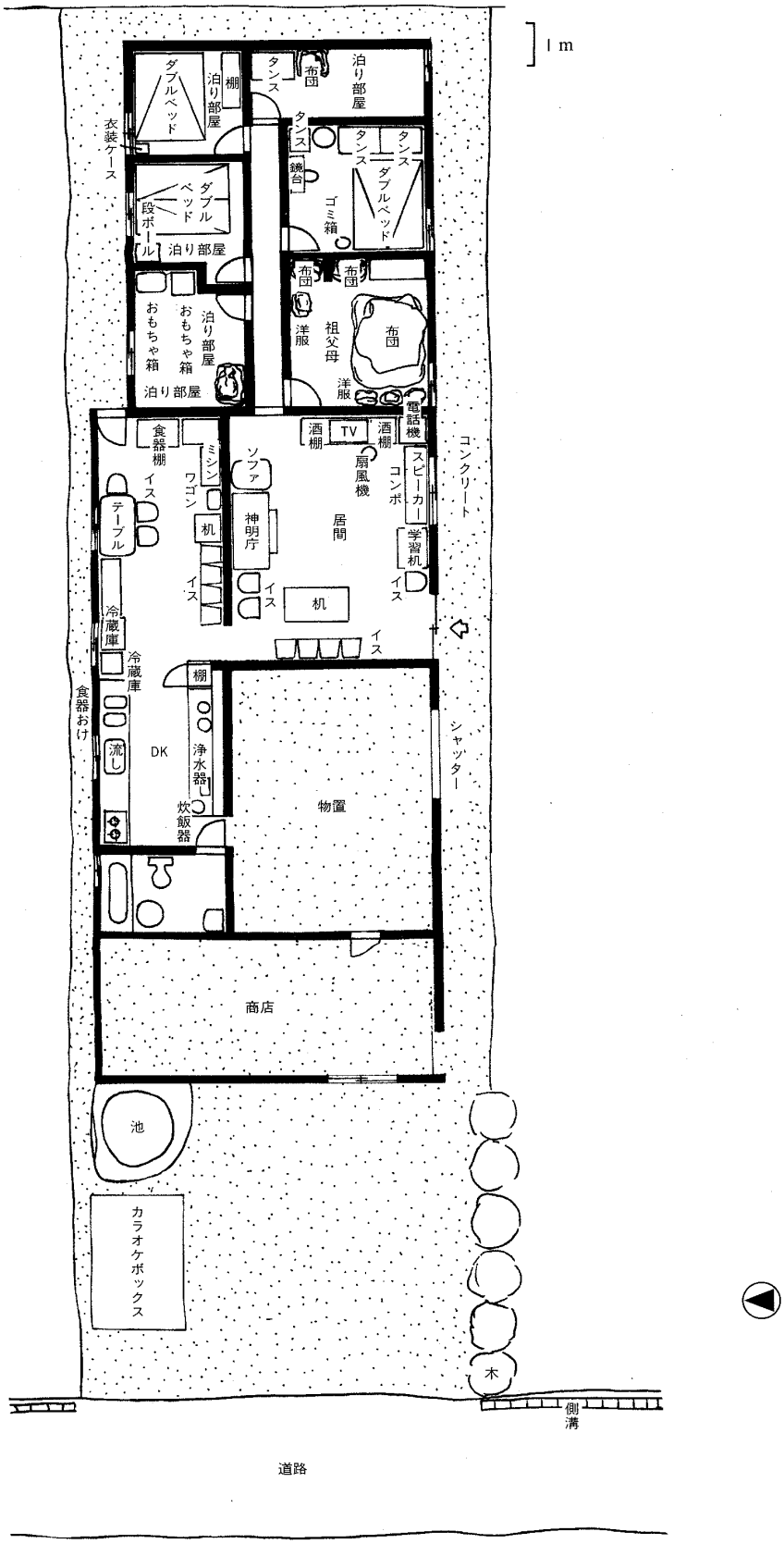
1 m
泊り部屋
布団
タンス
棚
ダブルベッド
衣装ケース
鏡台
ゴミ箱
段ボール
おもちゃ箱
洋服
祖父母
電話機
酒棚
TV
扇風機
コンポ
スピーカー
コンクリート
食器棚
ミシン
ワゴン
ソファ
イス
テーブル
机
神明庁
居間
学習机
冷蔵庫
食器おけ
流し
DK
浄水器
炊飯器
物置
シャッター
商店
池
カラオケボックス
木
側溝
道路

図 5

る．母は6番目の子どもの嫁であり，店を手伝うために同居している．その他の兄弟は皆進学のため埔里市に住んでいる．祖父は元々漢民族で，電力会社の仕事のためにこの土地に来た．30年前ブヌン族の祖母と結婚し，この土地を買い，家を建築した．現在ではこの集落で最も大きい家である．

この住宅は集落の真中付近に位置している．南北両方の道路に接している（当初は半分だったが後に残り半分を買い足したそうである）．北側の道路から敷地内に入ると庭があり，カラオケボックスが設置されている．また，小さな池があり，鯉を飼っている．手前は商店になっており，その奥に住宅が続いている．商店では，日常の食品や雑貨，文房具などが売られている．隣には倉庫もある．30年前に建築した住宅は現在の寝室部分のみで，当時3.000円で業者によって建築された．商店，倉庫，居間，DK，風呂は7〜8年前に90万円をかけて増築した．居間，DK，風呂は約2ヶ月，商店部分は20日で完成した．生活しやすさを重視し，蚊や蝿よけのためすべての窓や扉に網戸を付けている．敷地面積は約260m²，居住部分の延べ面積は115.3m²である．

寝室部分の壁は木造で，増築部分はスレート造りである．柱はすべて木造である．窓は寝室部分は木枠のガラス戸で，外側には鉄の柵が付いており，居間部分はアルミサッシに外側に鉄の柵が付いている．床は居間はフローリング，DKはタイル，廊下はクッションタイルである．

この住居は，居間，DK，風呂，トイレ，残余室6室で構成されている．入口で靴を脱ぎ，入るとすぐ居間であり，テレビ，応接セット，神明庁などがある．だんらん，接客は居間で行う．居間の右手には一段下がった廊下があり，その両側に残余室が並んでいる．廊下にはクッションタイルが敷き詰められ，居間に近い2室はその廊下より高床になっている．就寝部屋部分にには6室部屋があるが，現在日常的に使用している部屋は祖父母の寝室と母の寝室の2室である．その他の4室は息子や娘が帰宅した際に使用する部屋として確保されている．各就寝部屋には造り付けの収納場所はなく，使用しない布団は部屋の片隅に置かれ，衣類はタンスに収納するかそのまま部屋にたたんで積み重ねている．祖父母は床に布団を敷いて就寝する．布団は日中片づけることはない．母はベッドで寝る．居間の奥には一段下がった長細いDKがある．食事は母が毎回作り，DKで行う．DKから倉庫を通って商店へ行くことが出来る．典型的な漢民族の住宅といえる．

主な所有物は冷蔵庫（2），電気炊飯器，浄水器，食器乾燥機，洗濯機，ステレオ，電話，テレビ，ミシン，扇風機などである．

〈事例5〉（図6）

家族構成は母（66歳），子（男30歳，男23歳）である．子どもは2人とも農業をしている．山でトウモロコシと茶，野菜を生産している．長男（35歳）は結婚し，独立して家を建てた．母は日本語と高山族語しか話すことが出来ず，周囲の人たちとの会話は高山族語で行う．

この住宅は旧集落にあり，主要道路からさらに山を登ったところに位置する．下方には川が見渡せる．トウモロコシなどの畑の中に数軒ずつ点在する家のうちのひとつであり，この住宅の近くにはあと2軒ある．

敷地面積は約100m²，延べ面積は78.8m²である．築年数は4年で親戚が協力して半年位かけて建て替えた．建物と庇の分だけのコンクリートの上に建物が建てられている．屋根は波形スレートで，壁はコンクリート板，プラスター塗りである．窓はガラス戸で，外側には鉄の柵がある．DK，台所，風呂の床は石で敷き詰められ，居間と寝室3室はタイル敷きとなっている．居間にはさらに絨毯が敷かれている．居間の前の庇は波形スレートで，竿は竹で作られている．

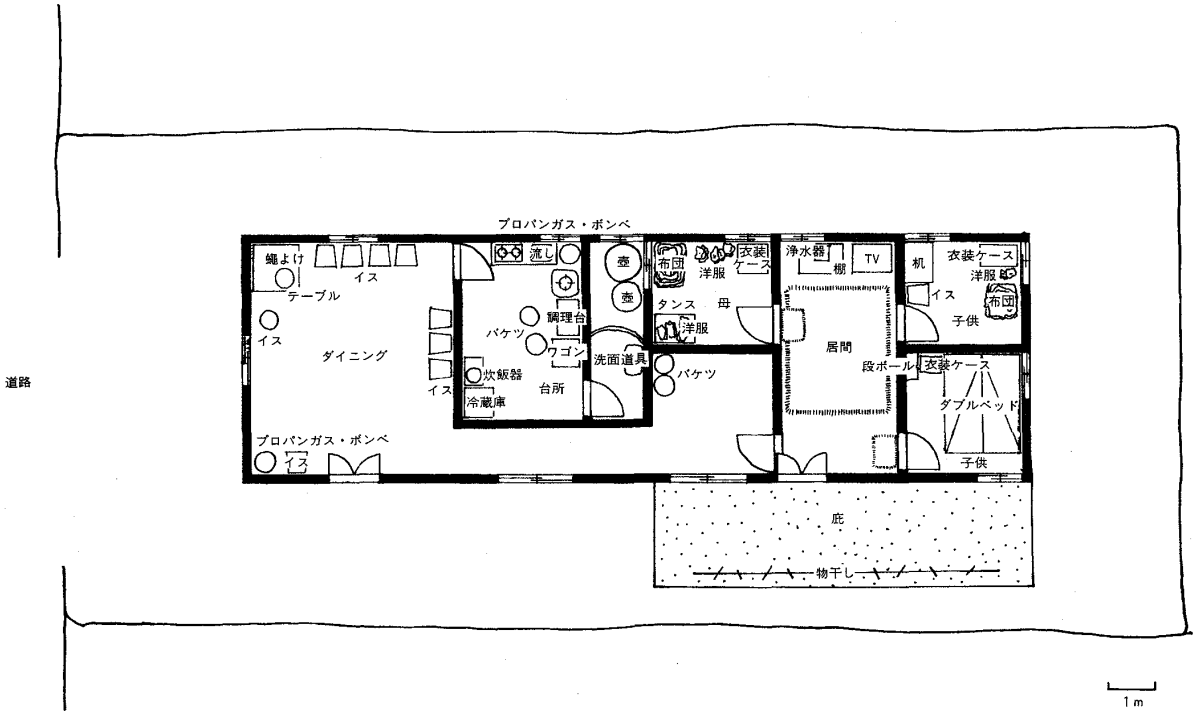

図6

住宅はダイニング，台所，風呂，居間，残余室3室で構成されている．入口はダイニングと居間の2ヶ所あるが，居間の方の入口には庇が付いており，こちらの方を主に玄関として使用している．入口前で靴を脱ぐが，下駄箱のようなものはない．入口を入ると，絨毯が敷かれた居間があり，テレビが置かれている．接客とだんらんは居間で行う．居間の右側に子供の寝室が2室，反対側に母の寝室がある．居間から通路を通ってダイニングへと行くことが出来，そこから台所，風呂につながっている．

風呂には大小のプラスチック製の壷が置かれている．炊事にはLPガスを使用している．洗濯物は庇部分に干している．

すべての部屋に造り付けの収納場所は無く，布団は部屋の片隅にたたんである．衣類はタンスや衣装ケースに収納している．

食事は子が作り，皆一緒に食べる．買い物はあまりしないがするときは子どもが行く．母は身体の調子が悪いため，埔里市へバスで薬を取りに行く．

主な所有物は，冷蔵庫，電気炊飯器，浄水器，テレビ，ラジカセである．

〈事例6〉（図7）

父母，子ども2人（2歳，3歳）の4人暮らしで，父母は農業をしている．

旧集落の主要道路からさらに山の方へ細い道を登った頂上に建っている．この旧集落の中では最も高いところに建っており，すぐ後方は山である．山地に建っており寒いが，冬の暖房なしでも耐えられないことはないという．敷地と道路の境界は竹と網で作られた柵で区切られている．敷地内に入るには同様に作られた扉を開けて入る．敷地内に入るとすぐ母屋があり，その両脇にはタマネギなどが置かれた小屋と，焚き物などが置かれた小屋がある．仮小屋のような簡単な作りであり、夏の山仕事用の小屋で、別に住宅があると言っていた．

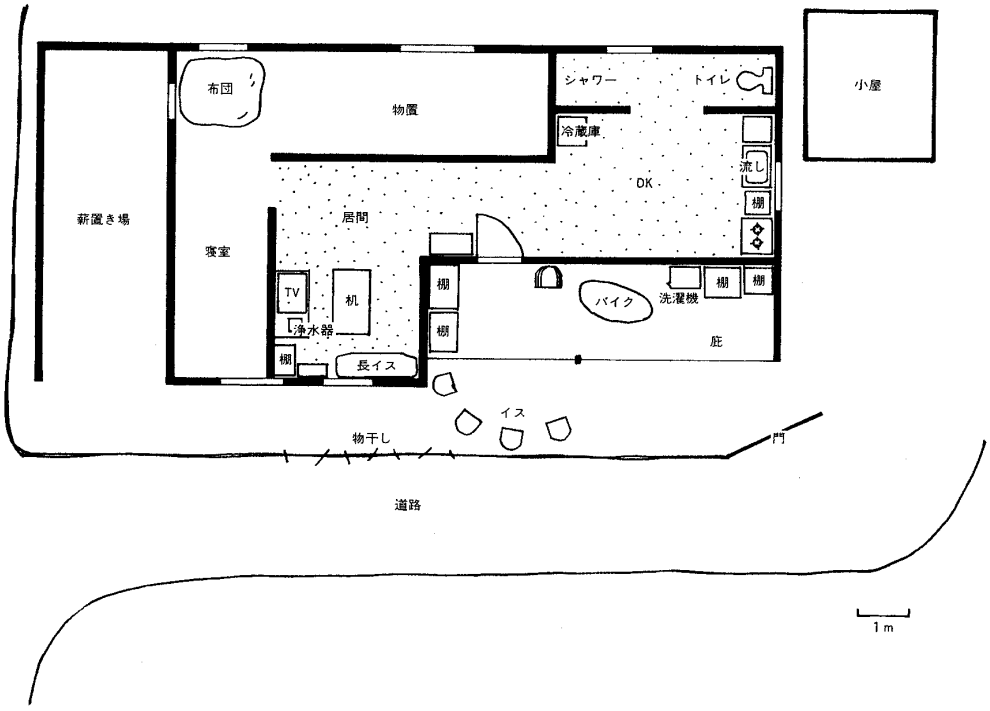

図 7

敷地面積は約 130m² であるが，点在型集落のため，敷地との境目がはっきりしていない．延べ面積 64.1m²，築年数は 5，6 年である．屋根や壁は主にトタンで出来ており，内部の仕切りと寝室の内壁，柱は木造である．寝室の壁には壁紙が張られている．窓は木の枠に木を横，又は縦に数本つなぎ，網を張っている．床はコンクリートで，室内はすべて土間である．ひさしは竹製の竿に網を掛けている簡単なものである．

母屋の構造は，入口を入ると右側に DK，風呂（シャワーのみ）・トイレがあり，左側に居間と残余室が 2 室ある．それぞれの空間には収納スペースはないが，1 室を物置としている．入口の手前には庇があり，椅子を広げ，普段はここで接客やだんらんを行っている．洗濯物は住宅前方の柵に干している．

主な所有物は冷蔵庫，電気炊飯器，洗濯機，テレビ，カラオケ，バイクである．

〈事例 7〉（図 8）

父（48 歳），母（40 歳），子（男 18 歳，女 15 歳）の 4 人暮らし．長女（17 歳）はタイヤル族の婿と結婚し，8 ヶ月の子どもがいる．台中市で暮らしている．父母は農業を行い，トウモロコシ，豆，サツマイモなどを生産している．

旧集落の端の平地に建てられており，祖父母の代からここに住んでいる．敷地面積は約 270m² で，敷地内には石が敷き詰められている．住宅のすぐ裏は山であり，前面にはトウモロコシ畑が広がっている．敷地内には主に石板で作られた建物とトタン造りの建物（写真 1），鶏や豚を飼う小屋がある．主に石板で造られた建物は 30 数年前に祖父が子どもの手伝いのもと，山から背負ってきた石板を用いて建設したもので，もとはすべて石板で造られていた（写真 2）．延べ面積は 51.6m²，築年数は 32 年である．しかし，14 年前の台風の被害に遭い，現在では壁の一部を木材に替えている．父はこれを機会にコンクリート造の住宅に建て替えたかったが，周囲の人たちの要望により石板を使用した住宅を残すこととなり，現在に至っている．トタン造りの建物は延べ面

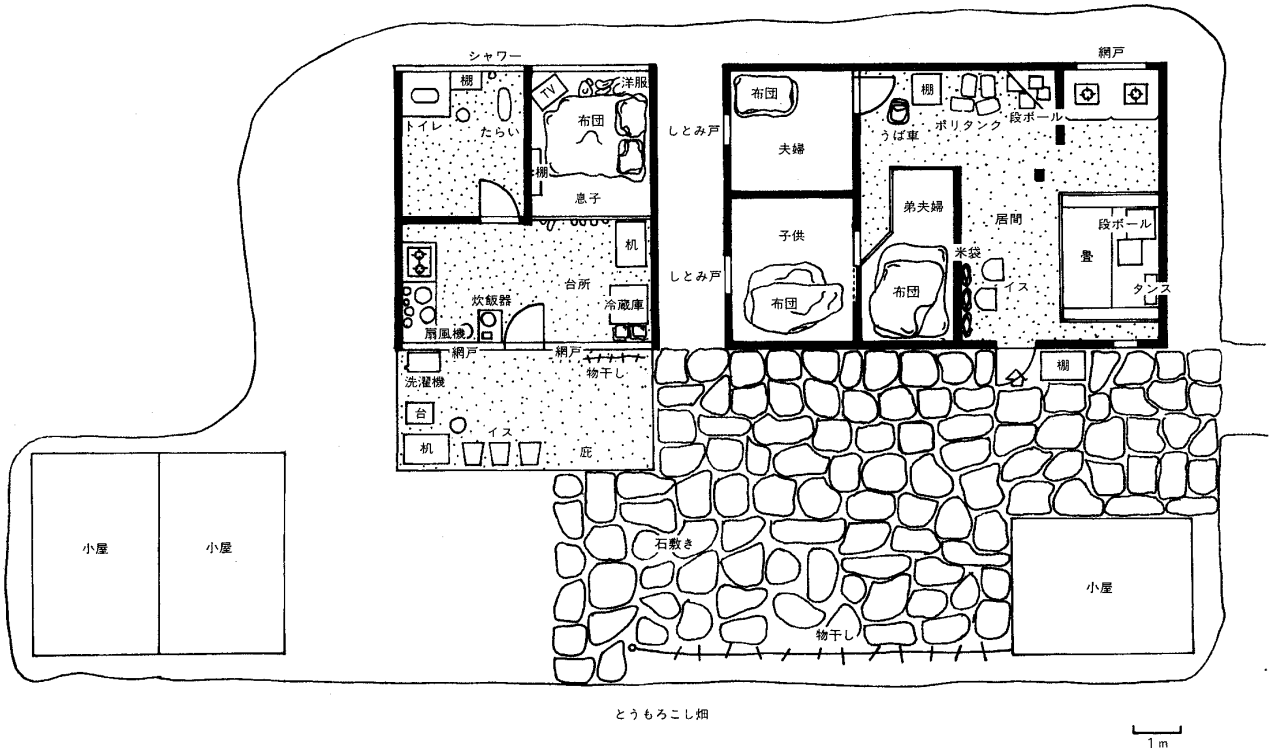

図 8

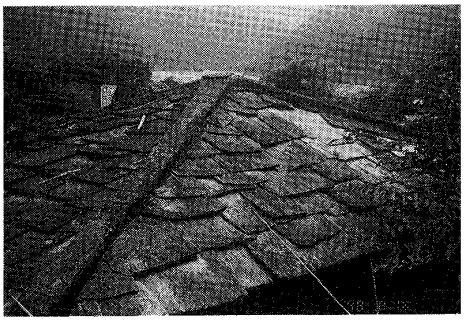

写真 1

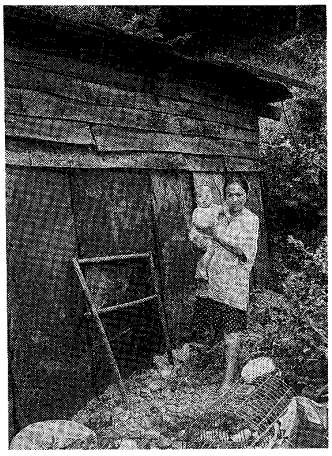

写真 2

は 27.4m², 6〜7 年前に新築したものである．小屋にはチャボや黒豚が飼われているが，この黒豚は裏の山から捕まえてきた野生のものであり，食べたらまた捕まえに行くという自給自足の生活を行っている．

石板で出来ている建物は屋根と壁の一部が石板であり，壁の一部と室内を仕切る壁は木造である．入口を入ると床は一段下がっており，石を張った土間である．入口より右半分は炉と一段高くなった畳敷きの高床，左半分は寝室が 3 つある．これらの寝室も高床になっている．窓はくり抜いた壁に板を隙間をあけて数枚縦に並べてあるものとしとみ戸の 2 種類がある．

トタン造りの建物は大部分がトタンで作られており，柱や窓枠などは木造である．窓は木の枠に網を張ったものである．床は台所部分が石を張った土間で，風呂，トイレ部分はコンクリート，もう 1 部屋は高床になっている．庇の屋根はトタン，梁は木造，壁は網で囲ってあるだけである．

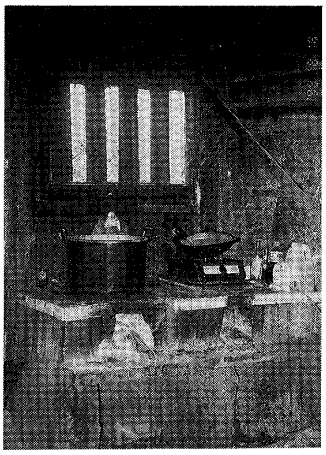

写真 3

石板の家は台所，寝室 3 室，入口入ってすぐの広いスペースで構成されている．台所にある炉は現在は石板とコンクリートで出来ているが，昔は土で作られていた（写真 3）．3 つの寝室はそれぞれ夫婦，娘，父の弟夫婦の寝室であり，息子は隣の建物で就寝する．それぞれの寝室には布団だけしか置かれておらず，寝室近くの作り付けられた棚や床に沢山のものが置かれている．入口近くの畳の敷かれた高床は昼寝の場であり，息子や父の弟などが普段使用する．

トタン造りの建物は台所，風呂，トイレ，息子の寝室で構成されている．息子が不在の時は夫婦がこの部屋で寝ることもある．息子の部屋にはテレビが置かれているが，あまり見ることはない．

食事は毎回母が 2 つの台所を使って作る．食事を食べる場所は特に決まっておらず，室内や外に置かれた椅子に座って食べる．接客やだんらんも屋外の椅子で行う．

涼しい午前中に農薬かけなどの農作業を行い，午後からは石敷きの前庭で作業や片づけなどをして過ごす．

これからもずっと住み続けたいと思っている．蝿が多いことが不満である．

主な所持品は冷蔵庫，電気炊飯器，洗濯機，テレビ，バイクである．

3-6．ブヌン族　中正村について

最後に中正村についてみていく．中正村は南投県埔里鎮に位置し，仁愛郷との境にある．昔は山地に点在した集落だったが，日本人による統治が始まり，約 100 年位前に旧集落から幾分低地にあるこの場所に移り住むようになった．現在では集落の大きさも拡大し，人口 600～700 人，世帯数約 150 世帯の村となっている．各世帯の敷地は日本時代に均等に分配されたものであり，現在では売買によって増減している．田の字型に車が通れる程の道路が走り，その間を数本の細い道が交差している．

村の運営は村長が行うが，村長は 4 年に 1 度の選挙で選ばれる仕組みとなっている．

年中行事は正月（1 月 1 日）とクリスマスに行われる．正月は小学校のグラウンドで村民全員参加の運動会が行われる．クリスマスには教会長が運営する村全体のパーティがある．祭の際にはブヌン族特有の百歩蛇の模様が施された民族衣装を着る．しかし，今日では他の集落と同様に文化や伝統は漢民族と同化している．

出産は埔里市の病院で行われる．結婚式は親戚や友人を呼んで個人的に教会で行う．結婚すると女性が男性の家へ嫁ぐのが一般的であるが，養子に行くというのも体裁が悪いとは考えられな

くなってきている．また，葬式も牧師や親戚に手伝ってもらい，自宅で個人的に行う．

住宅を建設するに当たり注意する点は特にないが，玄関を西向きにすることが多い．これは西方からの風によって涼しく過ごすためである．

集落全体の産業は野菜，ビンロウ，梅が主であり，集落のすぐ下方にはビンロウ畑が広がっている．台中市や埔里市へ働きに出る人も多く，また若年層の人々はほとんど都会で就職する．高卒が多いため，卒業後の就職は都市部における建築などの労働が多く，サラリーマン等の職に就くものはわずかである．この集落には小学校しかなく，中学校からは埔里市や台中市の学校に通う．埔里市への通勤，通学はバイク等で2，30分位なので通うが，台中市の場合は部屋を借り休みの時に帰ってくることが多い．

教会が3つあり，その他に小学校，集会所がある．山の上に大きな池があり，そこから水を各家のタンクに移して使用するが，夏には使いすぎによって断水になることが多い．商店もあるが，生鮮食品などはトラックで売りに来る．

3-7. 平面構成

中正村の住宅3例についてみていく．

〈事例8〉（図9）

集落の上方にあり，祖父の代も村長をしていた比較的裕福な家である．家族構成は，父（47歳），母（41歳），子（男23歳，男22歳，女20歳，女17歳）の6人家族である．父は村長，母は農業をしている．子ども（長男，次男）は共に軍人であり，次男はもうすぐ結婚し，養子として家を出る予定である．特に長男が家を継ぐという風習はないが，この家では次男が家を出るため長男が次ぐことになる．しかし家を継ぐだけのことであり，財産は全員に分配される．長女は大学生で将来は，ブヌン族の文化・伝統を他国の人々や後世の人々に伝えたいと思っている．母の兄弟のうち1人は同じ集落に居住している．

敷地面積は約220m^2，倉庫を除いた延べ床面積は91.5m^2，構造は煉瓦造りで，屋根は瓦葺きである．約20年前に親戚の手伝いのもと建設された．床にはすべてクッションタイルが敷かれている．この住宅は祖父の代に建築されたが，祖父は日本を好んでいたため障子を貼るなど随所に日本を想わせるような造りが見られる．全体的にはコの字型になっており，中央に入口を構え，入るとすぐ居間となっている．居間の前で靴を脱ぐが，収納するスペースはない．居間には絨毯が敷かれ，テレビ，ソファが置かれている．ここでだんらんや接客を行う．居間の右側にはDK（DとKは壁で半分仕切られている），バス・トイレ，長男と次男の寝室があり，左側には父母の寝室，長女と次女の寝室，物置がある．父母，長男，次男はベッド，長女，次女は布団で就寝する．この母屋に隣接して倉庫がある．

食事は毎回作るが，誰が作るかは決まっておらず，早く帰宅した人が作る．台所のテーブルで食べる．

これからもずっとこの集落に住み続ける．今の住宅は伝統的な住宅であるため誇りを持っており，不満もない．主な所持品はテレビ（2），冷蔵庫，洗濯機，電話，浄水器，炊飯器，扇風機，バイク（4）などである．

〈事例9〉（図10）

集落の上方（中央）に位置する教会から下る道沿いにある．家族構成は父（39歳），母（39歳），子（14歳，7歳，4歳）の5人家族である．父はこの集落で建設業を営んでいる．母の仕事

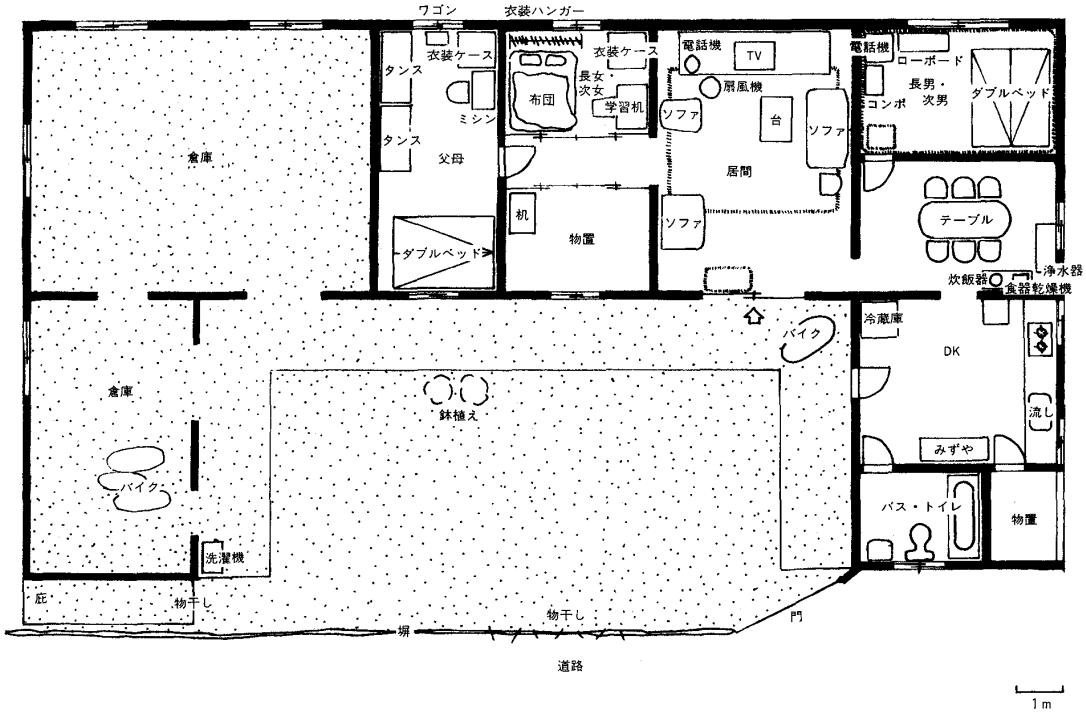

図 9

は農業である．長男は中学生であり，埔里市にバイクで通っている．

敷地面積は，隣接する祖父母宅，前庭を合わせて約 180m² であり，延べ床面積は 78.9m² (1．2 階のみ) である．1 階，2 階部分は鉄筋コンクリート造りであるが，3 階部分と屋根はスレート造りである．1 階の床はすべて石敷きで，2 階にはタイルが敷かれている．この住宅の隣には，壁を共有してもう一つの住宅が隣接している．この住宅には祖父母が暮らしている．祖父の代からこの場所に住んでおり，昔は同居していたが，現在祖父母が住んでいる家の隣に 15 年位前に新築し，移り住んだ．現在の住宅を建設する際の建築材料などは，父が建設業のため父の会社によっ

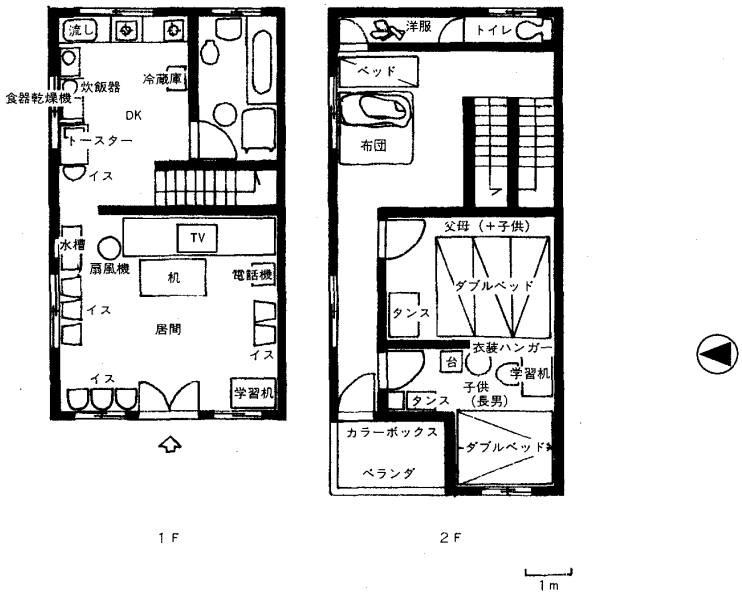

図 10

て仕入れられた．

この住宅は西側に向かって玄関があり，玄関を入ると石敷きの居間になっている．その奥にDK，バス・トイレがある．バスはユニットである．DKから上がる階段前で靴を脱ぐ．2階に上がると2室あり，一つは夫婦と長女，次男の寝室，もう一つは長男の寝室となっている．両部屋ともベッドが置かれている．この2室の手前にも布団が敷いてあり，ここにはたまに誰かが寝る．また，トイレとベランダがある．3階には貯水タンク，洗濯物干しがある．家の前には屋根付きの前庭があり，洗濯物を干したり，バイクや車などを置く空間となっている．煉瓦造りの低い壁によって隣との敷地の境界が分けられている．食事は母が作る．

主な所持品はテレビ，扇風機，電話，食器乾燥機，トースター，炊飯器，洗濯機，バイク，車，水槽などである．

〈事例 10〉（図 11）

家族構成は祖父（82歳），祖母（78歳），父（38歳），母（36歳），子（7歳，5歳，3歳）の7人家族である．父と母はビンロウ生産の山で日雇いで働いている．父の妹（36歳）は結婚し，現在埔里市に住んでいる．

集落西側のはずれの高台に位置し，祖父はここで生まれた．横に細長い敷地で，現在住んでいる建物の右手に日雇いしてためた貯金で新しい住宅を建築中である．敷地面積は今回の調査住宅の中で最も広く，約330m^{2}である．父は子どもが多いので大きく立派な家が必要と主張し，建築に至った．しかし祖父母は貯金がなくなることを心配しており，新築にあまり同意していない．もとの家は40年前に建てられ，現在よりも横に長かったが，今回の新築のために一部取り壊している．古い家のすぐ後ろには山がある．

新築中の住宅の延べ面積は158.1m^2，2階建てで，1階は東側の玄関を入ると廊下が東西にまっすぐ通り，そのまま裏戸となっている．この廊下の両側に居間，DK，風呂・トイレ，残余室が2室あり，2階には残余室4室と風呂・トイレ，テラスがある．鉄骨造りで，屋根は陸屋根の上に切妻のトタン屋根をかけている．窓はアルミサッシで，床はタイルが張られている．価格は260万元(日本円で約1040万円)，建築期間は4〜5ヶ月である．暑さ対策のために屋根を工夫している（陸屋根の上に柱を建てトタン屋根をつける)．この集落にも沢山の大工がいるが，関係が複雑なため埔里市の建設業者に依頼している．

古い家の方は当時90万元かけて建築したものであり，現在は古い台所(竈のため現在は使用せず)，祖父母の寝室，夫婦と子どもの寝室，物置が残っており，左奥に半分トタン屋根がかかったDKが新たに造られている．就寝は皆布団である．部屋や廊下には布団や衣類が山積みされており，収納意識があまりないと思われる．トイレは外に設置されている．現在はまだ古い家で暮らしているため食事，だんらん，接客は戸外のDKで行っている．新築中の住宅，現在住んでい住宅の前には前庭があり，イスを置き，ここでもだんらんを行っている．食事をはじめ家事は祖母が中心に行う．日本と同様，もち投げを行う．祖父母の結婚の際の結納金は5円であった．主な所持品は冷蔵庫，洗濯機，電話，テレビなどである．

4．まとめと考察

ここでは，住居の変遷を位置づけるため，比較検討の対象として1930年代の住宅調査[4]を参考

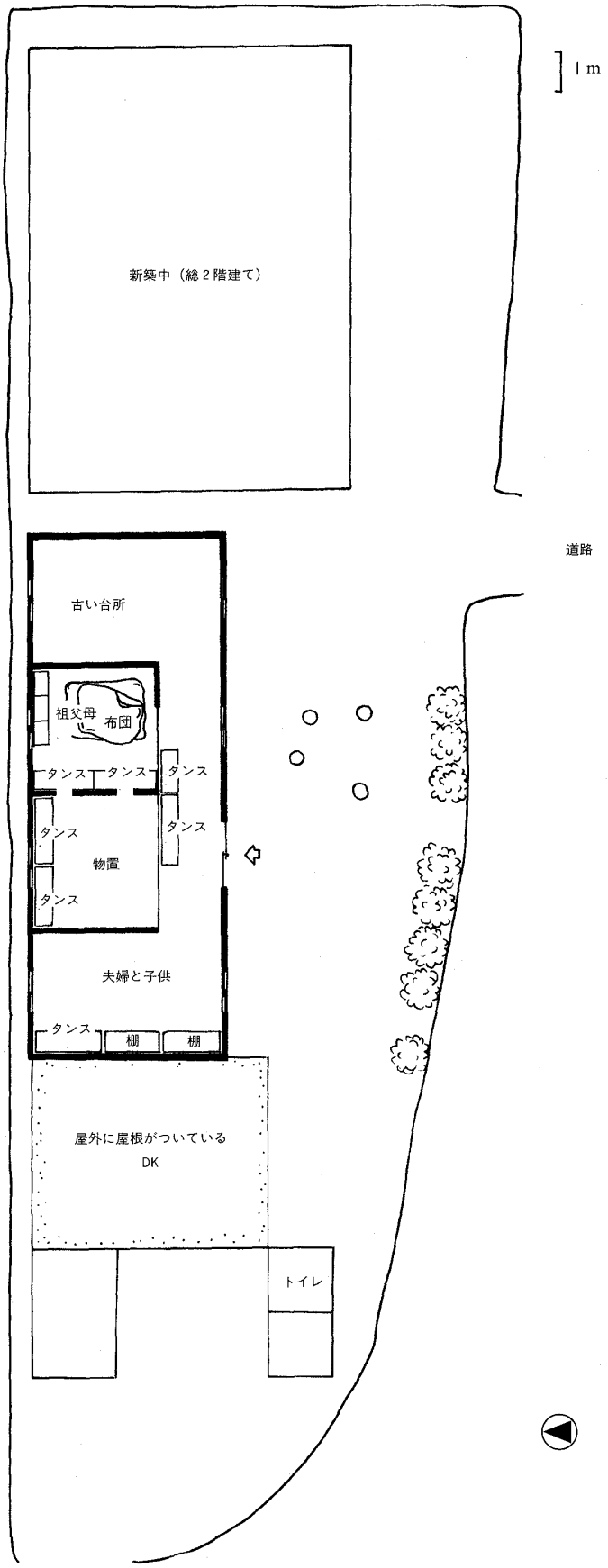
1 m
新築中（総２階建て）
道路
古い台所
祖父母
布団
タンス
タンス
タンス
タンス
タンス
物置
タンス
夫婦と子供
タンス
棚
棚
屋外に屋根がついている
DK
トイレ

図 11

としながらまとめることとする．

まず，タイヤル族について述べる．集落については，タイヤル族の伝統的な形態としては点在型と集中型のどちらもあるが，今回の調査村は集中型であった．子どもが至るところにおり，また，家屋内には高齢者が多く，出稼ぎによる過疎化が進行している集落である．

次に，タイヤル族の住宅において30年代の住宅事例17例と今回の調査住宅例2例を比較した結果，延べ面積については，平均面積が34.1m²から63.6m²となっており，2倍近くに拡大している．前庭は30年代，現在共に造られておらず，同様の結果となっている．付属建築物については，穀倉，鶏舎をほとんど設置し，1軒につき複数の建築物を建てる例が多かった30年代に比べ，現在では付属建築物自体造ることが少なくなっている．これは，以前は農業と共に家畜を飼うなど，生活に関することすべてを1世帯で行っていたが，現在では職業が多様化したため労働力は都会へと流出し，農業を行うにしても商品作物のみを生産するといった農業形態になったことが原因とみられる．

土座様式[5]は，竪穴式と平地式が共に半数ずつ存在していたが，現在では竪穴式は全くみられず，さらに地盤面より高いところに住宅を建てており，衛生的な面において考慮されているといえる．また，平面型においては30年代では矩形単室が圧倒的であったが，現在の住居ではすべて矩形複室となっている．これは，30年代においては就寝行為のみを室内で行っていたが，現在では食事やだんらんなどのほとんどの生活行為を室内で行うようになった結果であると考えられる．

建築材料をみてみると，床の材料はスレート敷き又はそのまま土間からタイル敷き，壁は積木式，竹造りからコンクリート造に変わっている．また，屋根はスレート葺き，竹葺きなどが多くを占めていたが，現在ではスレート葺き，瓦葺きが主流となっている．このように建築材料においてはどの部分においても今日の台湾で漢民族により使用されているものと同様であり，伝統的な材料はほとんど使用されなくなっている．このため，30年代の住宅よりも現在の住宅は気密性が高く，以前より暑さに弱くなっているが，それほど暑さに対する対策はなされていない．唯一床がタイル敷きであることが暑さを和らげるための工夫であると考えられる．

次に入口についてみると，数はどちらも1ヶ所のみの例が多く，入口方向は平入りが多い．付属している戸については，以前はすべて開き戸であったのに対し，現在のものには引き違い戸もみられる．30年代の住居において下足の履き替えを行っているかどうかははっきりしないが，現在はすべて履き替えを行っている．この履き替えの習慣は日本統治時代の影響によるものと考えられる．しかし，履き替えを行っていても，靴を収納するスペースは確保されていない．

窓の形態についてみてみると，30年代では開き戸が多くを占めていたが，今では引き違い戸の方が多くなっている．また，板戸からガラス戸へと変化しており，さらに外側には鉄柵を付けているものもある．

次に，部屋についてみる．30年代では部屋は寝室以外は空間に区切りはなく、寝る空間として寝台を設けていたが，現在では就寝が主ではあるがさらに他の行為もする（例えば勉強など）空間として位置づけられるようになってきている．さらに、一室への集中就寝が夫婦や子供別の分離就寝へと変化し，この寝室確保のために住宅内の仕切りがなされ，複室化していったと思われる．また，DKや浴室，トイレなどの水を使用する空間が室内に設けられるようになったことも大きな変化である．30年代にみられた穀倉，養蚕棚などは全くみられなくなっており，これは付属建築物の消滅と同様，消費形態や労働職種の変化によるものと考えられる．また，炉は全く消滅し，ガスを使用するようになっている．

次にブヌン族であるが，ブヌン族は大家族制のため典型的な集落構成は点在型であり，せいぜい小部落を構成する程度であった．現在の集落は，点在型のものもみられたが，日本統治時代に区画整理された土地に移住させられており，ほとんど集中型となっている．タイヤル族の集落同様，子どもと高齢者が多い集落で，子どもたちは近所の住宅に勝手に入ったりしている．これは近所との関わりを密に保っているからであるといえる．

ブヌン族の住宅において，30年代の住宅例8例と今回の調査例8例を比較する．延べ面積の平均をみてみると，79.8m² から106.9m² と約3割増加している．また，30年代では不明を除くとすべての例において前庭がみられたのと同様に，現在でもすべての例において前庭が確保されている．しかし，面積は縮小し，形式は全く変化しているが，使い方をみてみると名残がみられる．農業自体を行わなくなってきているところもあり，生産の場としての機能は薄れてきているが，イスを常備し，接客やだんらんを屋外で行っている点において以前の前庭の役割が残っていると考えられる．付属建築物をみるとどちらにおいても付設している割合が高い．しかし，30年代においてはすべての例が鶏舎など生活していく上で設置された建物のみであるが，現在の住宅においては池やカラオケボックスなどがあり，生活のゆとりを感じさせるものもみられる．

ブヌン族においても，タイヤル族同様自給自足の生活はなくなりつつあり，1例のみが豚や鶏を飼って生活しているにすぎなかった．しかし，この事例においても世帯主は建て替えを望んでいたが，伝統的な住宅を残してほしいという周囲の要望により現存に至っているといった経過があり，これからこのような伝統的な住居や暮らしが残っていくかどうかは分からない．

土座様式においては竪穴式が半数を超えていた30年代に比べると，現在ではほとんどの住居が平地式となっており，さらに2階建て，3階建ての住居もみられた．平面はすべて矩形単室から矩形複室となっている．

建築材料については，床は主にスレート敷きからタイル敷きへ，壁は石造りからコンクリート造り，鉄骨造りへ，屋根においてはスレート葺きから瓦葺き，トタン葺きへと変化している．この点については，タイヤル族と同様，漢民族の住宅様式をほとんど取り入れており，伝統的な材料を使用しなくなっている．

入口については，方向は昨今共にすべて平入りで変化なく，戸はすべて開き戸から引き違い戸が半数を占めるようになった．ブヌン族においてはまだ履き替えを行っていない住宅が2例みられ，どちらの例も日夜裸足で過ごしている．窓は30年代の住居においては天窓が設けられている例がみられたが，現在では全くみられなくなっている．また，戸の形態をみてみると，戸がついている例はあまりなかったのに対し，すべてに戸が付けられ，ガラス戸も普及している．さらに鉄柵や網戸が付けられている例が多くみられるが，これはまだ完全に衛生的な面が整備されておらず，蚊や蝿が多いためであると思われる．また，鉄柵の設置は犯罪の数が多くなったことを顕わしていると考えられる．

空間について大きく変化した点は，すべての例において設置されていた穀倉が現在の住宅においては全くみられないことである．また，タイヤル族同様，寝室数が増加している．しかし，30年代の住宅においても寝台を壁で囲んでいる例が半数みられたことから，タイヤル族よりも寝室の独立化（部屋の分化）が進んでいたのではないかと考えられる．また，老親，若夫婦の寝室はすべての例において確保されており，さらに家族員数以上の残余室を設けている例もみられる．このように残余室を多く確保しているのは，大家族制であるブヌン族の伝統的な住宅形式の名残であると思われる．しかし，現在子どもたちは進学や就職により都市へ出て行くため空き室になっていることが多く，帰省の際に使用するのみとなっている．DKや浴室，トイレは住居内に設け

られていなかったが，DK，浴室はすべての事例において，トイレは1例を除く全例において室内に設置されるようになった．都市部の住宅同様，各空間にタンスなどの家具類は置かれているが，押入のように初めから収納するスペースを設けているものはみられない．衣類などはたたんで積み上げているだけの例も多い．また，30年代の住宅においては仕事やだんらんなどほとんどの行為を前庭などの屋外で行っており，タイヤル族同様屋内は寝るだけの空間となっていたが，現在では屋内で行う行為が多くなり，またそれぞれ空間の機能が分化している．

現在の家族員数は2〜7人，世帯数は1〜3世帯となっており，大家族制で親戚と共に住んでいた頃と比べると1戸の住宅内に住む人数はかなり少なくなっている．しかし，今回の調査においてはほんの1例において2家族が一緒に生活している事例がみられ，これは大家族制の名残であると考えられる．また，家族員数の減少は子どもの都市への進学，就職により都市への定住が進んだこと，大家族制の中で暮らす意味がなくなったことに起因していると考えられる．職業においては，現在村に居住している住人はほとんど農業に従事しているが，子どもたちは都市へ働きに出る傾向にあり，そのため過疎化が進んでいる．

以上のように，現在，タイヤル族，ブヌン族を含む原住民族は，1930年代にみられたような伝統的な住宅にはほとんど居住していないということが分かった．また，住宅自体ももともとの土地には残っていない．その理由を考察すると，以下の3点にまとめられよう．

第1に日本人統治である．1895年から始まった日本による統治は不衛生，浪費といった理由で民族の室内埋葬や一部の祭などを廃止したが，今回の例においても影響がみられた．例えば，タイヤル族の伝統的な隅付け寝台が大型の寝台へと改良されたこと，また，ブヌン族の集落の構成においても以前は点在型であったのに対し，現在では日本人による区割りが行われた土地に構成された集中型となっていることなどである．

第2に漢民族によってもたらされた近代化の影響である．これが最も大きな影響を与えていると考えられる．特に1960年以降急速な経済発展を迎え，住宅に用いられる材料や住宅形式(平地式の浸透，2階建ての取り入れなど)においても大きな変化がみられる．特に都市に近いほど漢民族の文化を素早く取り入れており，近代化も速い．また，上級身分のものや現金収入を得た層も早期に建て替えを行っている．さらに，電化製品などの普及，交通の整備などにより生活も大きく変化し，物質的な面においては豊かになったといえる．

第3に文化村への移築が挙げられる．近代化に伴い，民族の文化継承が難しくなってきたことから，1980年後半頃から九族文化村，台湾山地文化園区など原住民族の文化，伝統，歴史の保存，さらに観光事業のために文化村の建設が行われ始めた．この建設に際し，伝統的な住宅はそのまま移築，復元されており，当時現存していた伝統的な住宅はほとんどこのような施設に移築された．そのため，今回調査したようないまだに使用されている伝統的な住宅は当時の低層民のものではないかと思われる．唯一残っていたブヌン族の伝統的な住居（石板造りの家）は，周りの住民からの要望により残されたものであるが，数少ない実生活が行われている伝統的な住居として価値のあるものであり，取材等の対象になっている．

このように伝統的な住宅はほとんどみられなくなってきたが，次のような点においては伝統の名残がみられると考えられる．まず，前庭において形態や規模は変化したものの，使用法はそれほど変わっていないという点である．生産の場としての役割はなくなりつつあるが，だんらんの場としては今後もあり続けるだろうと考えられる．また，住宅の規模や世帯数にみられる大家族制の名残である．しかしこの住宅の規模については，延べ面積，部屋数の増加はこれからも拡大

するであろうが，帰省者のための部屋として確保するという現在の使い方から居住者の個室を確保していくという方向へと変化していくと思われる．また，親族の同居に関しては完全になくなっていくだろうと考えられる．

このようにタイヤル族，ブヌン族どちらにおいても，大きく近代的な変化を遂げているが，わずかながらではあるが伝統的な部分の名残もみられる．しかし，原住民の伝統・文化を残そうという動きから文化村などに残している一方，実生活においては物質的な豊かさを求める傾向にあり，漢文化を含む近代化を選択している．そして，さらに今後も近代化の浸透が進むであろう．漢民族との格差は狭まりつつあるが，本当に原住民族の生活が昔より豊かになったのかは疑問であり，独自の伝統文化や芸術の衰退を早めたのは確かである．このような状況において，台湾原住民の伝統や暮らしを残しながら新しい文化を創り上げていくためには，更なる文化継承の意識が必要である．

本研究は，台湾原住民の集落及び住宅の変遷を住居学の分野からみたものであるが，今回の調査はかなり限られたものであり，伝統的な住宅の衰退，原住民族の生活の漢民族化を十分に明らかにしたとはいえない．今後はタイヤル族，ブヌン族以外の原住民族についてもみていく必要があると思われる．

謝　　辞

最後に，研究活動の手助けをして下さった同研究室卒業の宮崎智子さん，矢田部宮華さん，さらに調査に応じていただいた対象者の皆様に厚く御礼を申し上げます．

注及び参考文献

1) 台湾という名称について

台湾という名称が一般的に使用されるがこれは正式名称ではなく，正式には孫中山（孫文）が1912年1月1日に三民主義を基盤として名付けた中華民国である．しかし，本論文では日本で一般的に使われている「台湾」を用いることとする．

2) 原住民という呼称について

台湾には現在，最大多数の漢民族以外に，マレー・ポリネシア語族系統の原住民族が9族を数える．いずれも外部から渡来した人たちで，厳密な意味での「原住民族」はもう既に台湾にはいないとされる．しかし，最も早期に渡来したのはマレー・ポリネシア語族系統の山地少数民族で，彼らは台湾の原住民族だということができよう．この原住民族に対する呼称は，清時代には生蕃，日本統治時代には熟蕃，生蕃，蕃人，高砂族が使用されてきた．また，中華人民共和国政府は彼らを高山族と呼び，中国の55の少数民族の1つとしていた．国民党政府は山地同胞の呼称を採用してきた．しかし高山族，山地同胞とは漢民族が一方的につけたもので，しかも文化程度が低いという忌みを含んだ差別用語であるため，彼らは「原住民」と呼ばれるべきであると訴えた．それに対し国民党政府は，少数民族，先住民などを提案したが，少数とはマイナー，先住民の先は中国語では亡くなったの意味があるという理由でいずれも受け入れなかった．政府はなぜ「原住民」という名称を認めたくなかったのか．政府が最も恐れたのは，もし原住民として認めたら大多数を占めるこの島の住民，つまり漢民族は後から来た侵入者となってしまうためであった．最終的には政府が譲歩し，1994年の憲法改正に際して彼らの要望を受け入れ，正式名称として「台湾原住民」を採用した．現在「台湾原住民」は，9族約30数万人が認定されている．このような経緯から，本論文では「原住民」を用いることとした．

3) 台湾の伝統的住居については青木等によって一連の研究が行われている．
郭永傑・青木正夫・田中清章・伊藤真奈美：台湾山地原住民住居の平面構成に関する研究･･･ルカイ族旧好茶村について　その1･･･．日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）．pp.31～32．1993
郭永傑・青木正夫・田中清章・伊藤真奈美：台湾山地原住民住居の平面構成に関する研究･･･ルカイ族旧好茶村について　その2･･･．日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）．pp.33～34．1993
郭永傑・青木正夫・田中清章・伊藤真奈美：台湾山地原住民住居の平面構成に関する研究－ルカイ族旧好茶村について　その5－．日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）．pp.341～342．1995
伊藤真奈美・青木正夫・郭永傑・田中清章・竹下輝和：台湾山地原住民住居の平面構成に関する研究－ルカイ族新好茶村について　その1－．日本建築学会大会学術講演梗概集（近畿）．pp.17～18．1996
伊藤真奈美・青木正夫・郭永傑・田中清章・竹下輝和：台湾山地原住民住居の平面構成に関する研究－ルカイ族新好茶村について　その2－．日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）．pp.5～6．1997
伊藤真奈美・青木正夫・郭永傑・田中清章・竹下輝和：台湾山地原住民住居の平面構成に関する研究－ルカイ族及びパイワン族伝統家屋における祖柱の文様について－．日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）．pp.57～58．1998
4) 川島宙次：稲作と高床の国『アジアの民家』，「台湾の民家」，相模書房，pp.183～224，1989
5) 土座様式とは室内の床の状態のことで，室内が土間よりも高い位置に床が張られているか（高床式），グランドラインよりもほりこんで，そこに床を張らないで直接室内の床部分としているか（竪穴式），土間に直接床を張って，室内の床部分としているか（平地式）に分けられた．
6) 台湾研究所：『台湾総覧（1998年版）』，p.197，pp.246～247，pp.252～253，1998
7) 千々岩助太郎：『台湾高砂族の住家』，pp.1～22，pp.26～34，図版pp.1～85，図版pp.105～129．丸善株式会社．1960
8) 宮本延人：『台湾の原住民族－回想・私の民族学調査』，六興出版，pp.78～217，1985
9) 河添恵子：『アジア・カルチャーガイド7　台湾　それいけ探偵団』，トラベルジャーナル，pp.18～20，1994
10) 笠原政治．植野弘子編：『暮らしがわかる　アジア読本　台湾』，河出書房新社，pp.20～27，pp.94～99，pp.272～279，1995
11) 戴國煇編：『もっと知りたい　台湾』，弘文堂，pp.13～23，pp.32～53，pp.127～131，1986
12) 地球の歩き方編集室：『地球の歩き方31　台湾』'98～'99年版，ダイヤモンド・ビッグ社，pp.198～199，p.239，pp.245～246，pp.288～289，1997
13) 早乙女勝元編：『台湾からの手紙　霧社事件・サヨンの旅から』，草の根出版会，pp.41～42，1996
14) 柳本通彦：『台湾・霧社に生きる』，現代書館，pp.7～9，1996
15) 小西里花編：『台湾の本』，近畿日本ツーリスト，pp130～131，pp178～180，1996
16) 上海戯劇学院　中国民族服飾編集委員会：『中国諸民族服飾図鑑』，柏書房株式会社，1991
17) ジョージナ・アンシュワース：『世界の少数民族を知る辞典』，明石書店，pp.43～48，1990
18) 渋谷区立松涛美術館：『台湾高砂族の服飾－瀬川コレクション－』，pp.7～15，1993
19) 戸張東夫・劉文甫：『台湾・香港Q & A 100』，亜紀書房，pp.20～21，1996
20) 高橋士郎：『海外生活情報シリーズ1　台北・高雄・台中』，海外駐在員サービスセンター，1986